

教員免許状取得希望学生の教育実習後の 「大学の授業と教育実習」についての意識

The Consciousness of Students as the Prospective Teacher Course about "Lecture
in University and Practical Training of Teaching"

今井敏博 (和歌山大学教育学部)

Toshihiro IMAI

本稿は教育実習の事後指導での教育実習生のシンポジウムの分科会「大学の授業と教育実習」で話し合われた内容を、書記の学生の記録をもとにまとめ紹介したものである。筆者が、教育実習委員として、この分科会を担当したが、予想を上回る活発な議論がなされ、また学生の中からも教官に紹介してほしいという要望もあり、ここに記すことにした。

キーワード：教育実習，事後指導，教育実践

1. はじめに

平成9年度の教育実習事後指導が平成9年12月11日(木)の午後に行われ、3つのテーマ別分科会の議論の後、全体会で報告がなされた。3つの分科会のうち、筆者は、教育実習委員として「大学の授業と教育実習」の分科会を担当することになり、事前に、パネラーと司会者と進行について若干の打ち合せを行ったが、内容については当日自由な雰囲気の中で議論が行われた。

この分科会の参加者は48名で各自事前に同テーマでレポートを提出しており、その一部でパネラーを希望した者の中から3人にパネラーとしての最初の発言を依頼した。司会者の1名は希望者であり、司会者を助ける進行役の1名と書記2名は筆者が依頼した。

最初3人のパネラーが各約10分間程度話し、その後その内容を切り口として、フロアの学生たちが議論を行った。約2時間の予定時間を学生たちは活発に議論を行った。

以下では、書記2名の記録の内容と筆者のメモをもとに、テーマに関わる部分を中心に、なるべく発言内容のままの形で紹介したい。議論の間では細部にわたって会話のやりとりが行われたが、記録に記載可能であった主な意見のみを次に記載したいと思う。なお司会者は意見ごとに適時進行に関わる発言をしていたが、ここでは記録に残っている主な部分だけにとどめたい。

2. 分科会での参会者の議論の内容について

- S1：大学の授業は、理想論のように感じられる。例えば、教育実習では、生徒に接する中で「生徒をおこる」（生徒を注意する）場面に出会うが、そのような場合、どのように生徒に接していけばよいのか困った。授業の方法などの基礎的なことは大学でふれられることはあるが、実際に子どもたちと接する場面で生ずるであろう事柄については扱われていない。大学の授業を教員養成に重点をおいてほしい。大学は講義式で教官が主体で教育実習では児童生徒が主体になるのは当然かもしれないが、実習の機会を増やすなど、子どもとふれあう機会が多い方がよいと思う。もちろん実習にスムーズに入っていけるための自らの心構えや態度形成も大切である。
- S2：3回生までで大学で学んだことで教育実習に実際役だったことは少なかったと思う。大学の授業と教育実習とを全く別のものとしてとらえてしまっている。これは、学生にも教官にもいえるのではないか。学生としては、大学の授業の内容（理論）を実習で実践に生かしていこうという態度が必要ではないか。また、大学の授業もそのようにできやすいものであってほしい。入学してすぐ6月に実習があり（観察だけかもしれないが）教師という職業への問題意識をもって大学の授業を学んでいく大学もあると聞いたことがあるが、和歌山大学では、大学の授業と実習とは別のものというイメージのもので、3回生の教育実習が一大イベントのように感じられる。
- S3：教育実習を経験して、自分が子どもに責任がもてるかとても不安になった。そのため教師を目指そうかどうか自ら迷っている。子どもに頼られているというだけで教師として自己満足に陥るのもおかしいように思う。子どもになめられたらどうするか、問題行動をする子どもをどのようにとめるか、見て見ないふりをせず子どもに立ち向かうには何が必要なのか、自分にはわからないことが多い。これらは教育実習の期間が長いから得られるというものでもないように思える。大学の授業はただ単位をとるだけと考えていたことにも原因があるように思える。
- S4：教師と生徒との関係であり、人間どうしのつきあいが必要であるとはどういうことなのか。なめるなめられるということはどういうことなのか。たとえば、授業中ねている子どもがいたらどうすればよいか。注意すると授業の流れがとぎれる。

司会者：この分科会のテーマと少しずれているようだが、大切なことと思うので続けたい。

S3：ねている子は、そのまま注意せずほおっておいていいのか。後で注意するのはどうか。

S4：授業の展開にいくつかアクセントをつけることが大切ではないか。授業全体をねむくなくようにおもしろくすればよい。

S5：教材のおもしろさと教師自身の人間のおもしろさと両面があるのではないか。無理におもしろい話をする必要はあるか（内容から脱線して）。

S6：授業をおもしろくするための授業方法や教材の扱いについては、大学の授業の中でもわずかながらあったと思う。大学の授業を受けているとき直接役に立つと思わなかったも、教師

になって役に立つこともあると思う。自分は教育実習は大学の授業をある程度受けた3回生あたりがよいと思う。

- S7：具体的に指導案など実習で学ばよいか、大学の授業の中で学んでおいた方がよいか。
- S8：技術的なことは子どもがいるところで学んだ方がよいように思うが、指導案のことを実習までまったく知らないのでは困るのではないか。
- S9：教養は実用的でないが、大学では教養を学ぶと考えればそこに大学の授業の価値があるのではないか。いい教師をつくるための授業であれば、技術的なことばかりでなくてもよいと思う。
- S10：教科教育法の授業も様々で、教育法を学んでいるという実感のあるものもあるが、そうでないものもあるように思う。
- S11：特に小学校教科〇〇という科目の授業は、小学校の教師を念頭において大学で授業してほしい。
- S12：大学の授業に不満があれば、それを教官など大学側に申し入れるべきである。そのような場がほしいし、方法を知りたい。
- S13：教育実習については、日々自分の努力が何よりも大切だし、悩みながら学んでいると思う。
- S14：大学の授業は教育実習にあまり役立っていないと感じている人が多いようであるが、自分たちが提案していかないと大学は変わらない。そのために自分はこの分科会に参加した。
- S15：1，2回生の頃には、教師になるための方向を定めるような形の授業を受けたい。また、自分は、子どもとふれあって、つきあっていけるという自信がもてるような機会がほしい。
- S16：自分も大学の授業は直接役に立っていないと思う。知識を得る授業は、すぐに役に立たないが知識を得るための授業であると自らわりきって受けている。しかし、教師になるための授業については、提案していかないと大学は動かない。
- S17：自分たちは、ゼミで指導教官に申し入れ、模擬授業などを試みたりして、知識を実践に役立てていく工夫をしている。教授法については、自分たちから提案していくべきであると思う。

3. おわりに

分科会での主な意見について、書記の記録と筆者のメモから記述した。実際の議論では、それぞれの意見についての細部での反論などもかなりあった。しかし、すべて記録できないことや録音しなかったこともあり、主な点のみ取り上げた。そのため、やや表現など違っている部分もあるかと思うが、主旨については記したつもりである。

教員免許状取得学生の各々が、自らの学習を振り返り反省するとともに、大学の授業について様々な印象また時には批判をもっていることがわかった。これは、その学生が教員を進路希望としているかしていないかに関わらず、教育実習という経験をもとに、それを契機として、大学の授業への捉え方に問題意識が生じていることを示していると思われる。

ここでは記載できなかったが、参会者が事前にレポートとして記述した内容からも伺える。

学校現場では様々な事件や問題現象が生じ、教員養成についても様々な論議がなされている中、教育実習を経験した学生たちの意見からも、これからの教員養成のあり方について示唆を与えてくれる部分があると思われる。

なお、意見をひきだし、活発に議論を展開した司会者の生駒君、パネラーとして、明瞭な意見を述べた本岡君、金子さん、井上君、マイクをもって議論の進行に協力した板倉君、書記を担当した植松さん、宮本さんの協力のもとに、この分科会がもたれたことをここに付記しておきます。